国際研究　No.10　1994.1

日本型近代家族
―住まいと家族モデルの変遷―

西川祐子

Ⅰ．はじめに（近代家族とはある国民国家の基礎単位とみなされる家族モデルのことであり，すべての国民国家は家族国家である）

戦前の日本は「家族国家」を自称しており，また，そのことが他に類をみない日本の特色であると主張していた。だが一国の元首が私生活を公開して模範的家族のイメージつくりに苦心したり，配偶者をともなって外国を訪問するしきたりをみても，近代国民国家はいずれも家族の情緒的な結びつきを国民統合に利用する家族国家であると言えはしないだろうか。そもそも欧米にはじまった近代の国民国家は，家族を率い，財産を持つ市民の集合として出発したものであった。

私はむしろ近代家族とは，近代国民国家の基礎単位とみなされた家族であると定義したい。そう定義することによってはじめて，国家間で近代家族のあり方を比較することの意義がうまれるのではないだろうか(1)。各国の近代家族モデルは各国の資本主義の発展段階に直接に対応するのではなく，世界を分割し，力関係を絶えず変化させつつ互いの均衡をたもっているそれぞれの国民国家のあり方に対応しているとおもわれる。世界の国民国家体制の中で流動する力関係がそれぞれの国家の内部の構造に圧力をくわえ，国家の基礎単位としての近代家族はそのつどモデル・チェンジをしてきた。どの時点で世界の国民国家体制に参入したかという時間差が，それぞれの国がそれぞれの家族政策についてとる戦略に反映しているとおもわれる。

じっさいには一つの社会のなかにも，さまざまなタイプの家族が存在するのであるが，各国はそれぞれある近代家族モデルをつくり，またたえずそのモデル・チェンジをしている。モデルは理念であって現実ではないが，現実にたいしてある強制力をもつことは近代家族の入れ物として住まいの変遷をみてもあきらかである。

本論では日本の近代家族は「家」制度／「家庭」制度の二重制度であるとする立場から，家族とその入れ物である住まいのモデルの変遷をたどりたい。戦後の新憲法と改正民法により，「家」制度は消滅するか，あるいは，次第に「家庭」制度のなかに吸収されて終わる。核家族が一般化し，その入れ物であるいわゆる3LDKの「リビング・ルームのある家」の一般化もまたはじまる1975年前後が，日本における近代家族のモデルと現実がほぼ一致する，近代家族の完成点であった。だが，先進諸国の近代家族はそれぞれ，完成と同時に変貌をはじめる。70－80年代のフェミニズム運動も近代家族の変貌の一つの現れである。もし近代家族の完成までの経過にも，その変貌にも，他と比較しうる日本社会の特徴があるとすれば，それはどのようなものなのだろうか。

Ⅱ.「家」制度／「家庭」制度（日本の近代家族は二重構造をとった）

1．明治の新語：「家」／「家庭」（「家」も「家庭」も現実より先に理念が成立し，その後に国家と国民が共同して意味を充填した言葉であった）

日本に独特の伝統的な家族制度は「家」制度であったといわれてきた。戦後には「『家』は封建的家父長制家族制度の遺制である」(2)とされ，戦後憲法と戦後民法は戦前の「家族国家」の基となっていた「家」制度を廃止したのであった。それにたいして，「家庭」は英語の「ホーム」の翻訳語の一つであるとみなされたことも原因となって，「家」は封建的な家族の入れ物を，「家庭」は近代的な家族の入れ物を指すとされた。戦後には，封建的な「家」を廃棄して近代的「家庭」を建設することが新しい民主的な国家の

建設につながるとされ，「家庭」は戦後の流行語となった。そこから「家」は古い家族制度，「家庭」は新しい家族制度を表すとする錯覚も生まれた。

しかし「家」と「家庭」はともに，明治の新語あるいは流行語であった。「家」という語の後に「家庭」という語がつくられたのではなく，「家」と「家庭」は，むしろ最初から対になることば，あるいは概念として同時に用いられはじめたのであった。

なるほど「いえ」（又は，「いへ」）ということばは，人間が住むための建造物という意味で古くから使われてきた日本語の単語である。建物という意味から派生して家族，とくに先祖代々伝えてきた家族集団をさす意味も古くからある。明治民法（1896，98年）はたしかに戸主が他の家族員を支配することを可能にする強大な戸主権と，戸主の地位と財産そして先祖を祀る義務とを男性長子が優先的に継承する家督相続を定め，これをもって「家」制度の中核とした。この「家」制度は明治革命以前の武士階級の家門と家禄の世襲のあり方に似ている。

しかし，じつは武士階級だけではなく，商家にも暖簾の継承にもとづく家族制度があり，農民もまた，生産用具を継承する種々の形の家族制度をもっており，それぞれ家族集団を「いえ」と呼ぶことが多かった。だが，それぞれの階層の家族制度は同じではなく，また地方によっては末子相続や，姉相続といわれるような女子による相続も存在するなど，さまざまな「いえ」制度があったのである。

また明治民法の「家」制度は，前近代においては家産とされていたものが戸主の個人財産となって流通が可能になるなど，けっして封建的な家族制度の遺制であったのではない。階級や地方によってさまざまな伝統的家族をあらわす「いえ」と，明治民法の「家」制度の「家」は，ちがうことばとして区別して用いるべきであろう。夫婦間の不平等，妻の法的無能力などの規定はむしろ，同時代の西欧諸国，とくにフランス民法に倣ったところが多い。

もっとも大きな違いは，さまざまな「いえ」の上位集団は幕藩体制の藩であったり，村落共同体であったり，職能集団であったりしたが，「家」制度の「家」の上位集団は国家であり，「家」は戸籍を構成し，明治新政府の構想する国民国家の基礎単位とみなされたことである。遅れて世界の国民国家体制に割り込む日本は，国民の労働力と資本を集中させるべく，天皇を頂点にすえた絶対主義的な国家体制をつくり，その基礎単位として，戸主を頂点にすえた「家」制度を設定したのであった。「教育勅語」(1890年)は「一国ハ家ノ拡充セルモノ」と述べている。

「家」制度の「家」は，明治民法によって，他のさまざまな「いえ」とはちがう新しい意味を充填されて新語に生まれかわったのであった。明治民法第733条は「子ハ父ノ家ニ入ル」第788条には「妻ハ婚姻ニ因リテ夫ノ家ニ入ル，入夫及び婿養子ハ妻ノ家ニ入ル」とあり，第746条には「戸主及ビ家族ハ其家ノ氏ヲ称ス」とある。また「家」に入っているのは戸主の妻子だけでなく戸主の親兄弟さらにその妻子であった。だが，この家族集団は戸籍上の観念的な家族であって，同じ屋根の下に暮らす現実の生活共同体としての家族とは一致しない。

他方，「家庭」という単語は「家」とはちがって，明治期の流行語であることがはっきりと意識されていた。しかしこの語も「家」とおなじく新造語ではない。「家庭」を「やにわ」と訓読みに読ませるなら「人家のあるところ」という意味で『古事記』の歌謡に用いられており，古い日本語の単語である。「かてい」と音読みするなら，語源は中国の古典にさかのぼる。日本語文献としては，近世にこの語を題名に用いた『家庭指南』(1714年)という小冊子が存在する。だが「家庭」が雑誌を中心にひんぱんに，大量に使われはじめるのは，明治20年代のことであった。「家庭小説」とよばれる一連の通俗的な家族小説が生まれたほどである。

そして，「家庭」という語が流行した時期は，「家」制度を理論化して98年の民法制定にいたる約10年のあいだ法律家のあいだでくりかえされた「民

法論争」の時期に一致する。このあいだに民間でも巖本善治の『女学雑誌』などにおいて，先祖崇拝と親子関係重視の「いえ」と，キリスト教的な一夫一婦永続婚の夫婦が協力をしてきづく「ホーム」のちがいが議論された。「いえ」はやがて「家」制度の「家」に，「ホーム」は漢字表記されて「家庭」となった。先祖崇拝と親子関係重視の「家」と，夫婦関係重視の「家庭」は，はじめから対概念として用いられたのであった。

2．雑誌によって普及した「家庭」（「家庭」は「家」と同じく，家族の抽象的な入れ物を意味する）

明治期には，題名に「家庭」に冠した雑誌が数多く刊行された。なかでも徳富蘇峰が主催した『家庭雑誌』(1892年－1898年)，堺利彦の同名の『家庭雑誌』(1903－1909年）および羽仁吉一・もと子の『家庭の友』(1903年創刊，のちに『婦人の友』となって現在にいたる）が果たした啓蒙的な役割は大きい。この三つの雑誌に共通の立場は，明治政府による先祖崇拝と親子関係重視の「家」制度の「家」に対抗して，夫婦中心の「家庭」の建設を説いたところである。徳富蘇峰は「家」ではなく「家庭」を国民国家の基礎単位とすることを主張して，市民的な家庭教育の必要を説いた。堺利彦は社会主義者であったが「家庭の中よりして漸々社会主義を発達せしめて行かねばならぬ」という立場から夫婦の平等を説いた。羽仁もと子は，専業主婦の家庭内での地位の向上と，主婦主導による生活管理，家庭の団欒，家事の合理化，科学的な育児を説いた。

こういった啓蒙的な雑誌の予定された読者は，都市の知識階級の男性と，その配偶者になるべき女学校出身の女性であったであろう。だが現実には女学校を卒業し，啓蒙的な雑誌を読みながら家庭を経営する専業主婦の数はまだ少なかった。「家庭」という言葉は現実に先行して，雑誌の中，活字の世界で理念の方が先に成立したことばであった。

「家庭」ということばが真に大衆化するのは，次にくる商業的な婦人雑

誌の時代においてである。1916年に創刊された『主婦の友』は，その年のうちに２万部の発行部数を記録し，1923年には30万部，1932年には80万部発行となった。『主婦の友』を代表とする婦人雑誌は「家庭」を生産の場から分離した消費の場と位置づけ，主婦に家事，育児の実用的な記事を提供し，家計簿をつけることをすすめた。この雑誌は「家庭」を消費の場と規定しており，しばしば読者から募った家計簿の公開と，その批評を載せていた。それをみると，読者の経済生活は中流の下のつつましさである。内職で家計を補う主婦もいたとみられる。現実にはつつましい生活をおくりながら，家庭に専業主婦のいる中流の給料生活者の生活に到達し，一家の楽しい団欒のある「家庭」をきづくことを目指す層を大衆的婦人雑誌は読者にとらえていた。婦人雑誌は主婦に日記と家計簿をつけて日々を反省しつつ，模範的な家庭経営をするように教育したのであった。

他方，婦人雑誌には連載小説や有名人の恋愛，結婚，家庭生活などの記事も豊富であった。なかでもグラヴィアのページに皇室皇族の家庭生活，団欒の光景が報道されるのが常であった。「家庭」の観念とイメージは現実よりも先に，雑誌の記事と挿絵やグラヴィア写真で形づくられていった。

このような商業的な婦人雑誌において「家庭」ということばがひんぱんに用いられるうちに，「家庭」は「家」との対立をしだいに曖昧にしてゆき，用語の混同がおこっていることも興味深い。夫婦関係中心の「家庭」であるはずなのに，家庭婦人の最も大きな悩みは姑との葛藤であった。大衆的婦人雑誌の身の上相談の中には嫁姑問題が数多くとりあげられている。身の上相談の回答は親に孝行，家門大切，先祖崇拝を説いている。

1920年にはじまる国勢調査をもとに日本社会の家族構成を算出した戸田貞三は核家族54%，直系家族30%とした。当時，長男は故郷の家に親たちと同居し，次男三男は都市あるいは植民地において核家族を構成することが多かった。だが都市で「家庭」をきづく次男三男も分家をしないかぎりは妻子ともども戸籍上の「家」に属し，長兄が住む故郷の家に帰属意識を

持っていた。長男が兄弟姉妹あるいはその家族まで扶養する，あるいは都市の給料生活者となった次男三男が自分の家族を養うだけでなく故郷の「家」への仕送りを負担することがあった。対立概念であるべき「家庭」と「家」の用語混同の背景にはこのような「家」制度と「家庭」制度を二重に生きる人々の現実の生活があった。同居のあるなしにかかわらず存在した嫁と姑の葛藤は，嫁は「家庭」だけでなく「家」に属し「家」を優先させて姑に仕えなければならないとする二重家族制度が生み出した問題であった。

3．「家」／「家庭」の二重家族制度（二重家族制度は西欧先進国に遅れて世界の国民国家体制の割り込み資本主義競争に追いつくため明治政府がとった戦略であった）

都市には単身生活者と核家族世帯が増えつづけていた。農村の富裕な家族の息子や娘たちは都市の学校に入るために，都市にやってきた。貨幣経済はしだいに農村の貧しい家族の若者たちをも都市へひきだした。彼らは最初は都市の中流，上流家族の住み込みの召使となるか，当時，数多く存在した人力車の車夫となった。産業革命がおこると，農村から都市に働きにくる若者たちの多くは工場労働者となった。労働条件は悪く，賃金は安かったので，彼らは所帯をもつことが困難であった。特に女子労働者は自分で自分の労働力を売るのでなく，工場は娘の親と契約をむすび，親はあらかじめ娘の給料を年期でうけとることができた。娘たちは親や兄弟たちのために犠牲となって劣悪な労働条件の下で働く安価な労働力となった。とくに戦前の日本の経済発展をささえた繊維工業はこのような安価な女子の労働力によって国際競争に勝つことができたのであった。また長男による単独相続は，資本の分散を防ぐ役割もはたした。

やがて農村から出てきて，都市の学校を卒業したり，都市の工場や会社で働くうちに農村にある親の家にはかえらないで都市にすみつき，都市で結婚する男女がふえた。とくに次男三男たちは戸籍上は「家」に属しなが

ら，現実には都市で「家庭」を営む二重家族制度を生きる他に，分家して初代の戸主となり核家族の「家庭」を経営するものも増えた。しかし受け継ぐべき家産なしに出発するこれらの「家庭」の基盤は弱く，不況による失業，戦争による災害のたびに崩壊し，都市の住民はそのたびに彼等の父ないしは長兄が営む「家」をたより，実際に故郷の村にある「いろり端のある」家に帰った。

太平洋戦争中，内閣総理大臣の東条英機は大日本婦人会の総会において「日本ノ最モ強ミデアル家庭ヲモトトシテ」[3]戦争を行うと言い，「家」とは言わなかった。彼は戦争は国民国家によって行われており，「家庭」がその国民国家の現実の基礎単位であることをよく知っていたのであった。戦時下の地域の生活は隣組と呼ばれた相互扶助と相互監視の組織で行われたが，その単位は「家庭」であり，「家庭隣組」という言い方があった。

他方，敗戦のときには農村の「家」は都市の破壊された「家庭」からの帰還者，罹災者や外地からの引き揚げ者をかろうじて吸収したのであった。遅れてきた近代国家であった戦前の日本は「家」／「家庭」の二重家族制度を利用して社会保障の費用を節約し，経済競争において先進諸国に追いつく努力をしたと言うことができるであろう。

Ⅲ．「いろり端のある家」／「茶の間のある家」（家族の具体的入れ物である住まいのモデルも変遷する）

1．大きな家と小さな家（明治革命直後の日本列島，とくに農村地帯には中産階級と中程度の大きさの家が少なかった）

近代日本の住まいのモデルの変遷を「団らんの構図の変化－いろり端，茶の間からリビングへ」と表現したのは，実は10年前に私が集めた住宅広告のコピーの中にあった建売住宅産業の広告文である。そう言われてみれば，売るための家には当時すでに「茶の間のある家」は無く，「リビング・ルームのある家」ばかりであった。だが私は「茶の間のある家」を知って

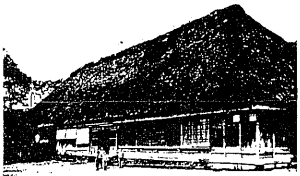
いるし，農村にあった「いろり端のある家」もかすかに覚えている。むろん人々のすべてが同じような家に住み，同じような住み替えをしたわけではない。どの時代にも古い家と新しい家は併存する。都市と農村の違い，地域差，階層差がある。日本列島は多種多様な様式の住まいにおおわれている。だが近代家族の入れ物について考える上では，現実の住宅の実情と同じく，あるいはそれ以上にあるべき家のモデルの変化が重大であるのかもしれない。私はこの広告文によって，近代120年のあいだにモデルの変遷がこのようにたびたびあったこと，人々がそのたびにモデルの変化を追いかける努力をしたこと，その結果としてモデルの普及が急速に徹底したことに気付いて，それ以来「家庭」という観念の成立と住まいのモデルの変遷の関係について考えはじめた。

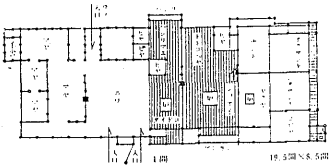
明治のはじめの日本列島の民家の現実はどのようなものであっただろうか。初期の証言の一つはアメリカからやってきた博物学者エドワード・S・モースの『日本のすまい－内と外』(1886年) である。モースは日本の都市の中流階級の住宅に注目するのであるが，他方，日本の人口の90%をしめていた農民漁民たちは大きな家か無数の小さな家のどちらかに住み，農村には中程度の大きさの家しか無かったと繰り返し指摘している。「一方でおおきな茅ぶきの屋根と主屋の周囲に数おおくの蔵，離れ屋をしたがえて，その富と生活の豊かさをしめす快適な住居があるとおもえば他方には，たんなるシェルターにすぎない住居が何百とある」「たいていの家は，いうにいわれぬほどちいさい」[(4)]などである。

おなじく日本の民俗学者，柳田国男もまた『明治大正史世相編』(1931年) において，「最初に誰でもすぐ心つくことには，家には二通りの種類がはやくからあって，それが日本では入り交じっているという事実である。一方は通例大きくて念入り，他方は粗末なものであった」[(5)]という。柳田は小さな家を「こや」と呼び，「こや」はもともとは寝るためだけの目的の空間であって，食べることは竈や囲炉裏のある大きな家に依存していた，小さな

家に竈がつき農民が所帯をもつのは比較的最近のことだと考える。また彼は「こや」は大きな家の中に入って「へや」と呼ばれるとも言う。

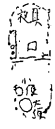
有賀喜左衛門著『家』より





斉藤家住宅（岩手県）1934年現在

貧民住宅

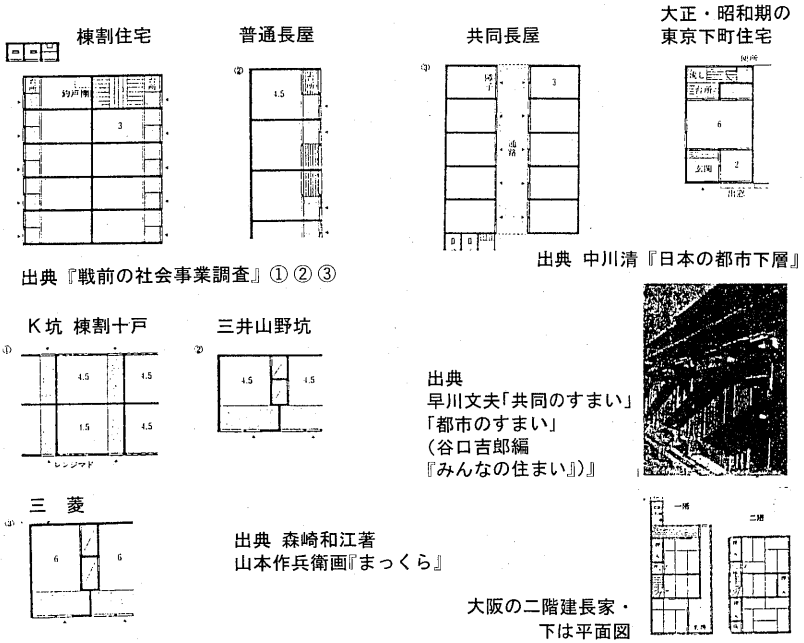


浜口ミホ引用
石原憲治著
『日本農民建築』

農村の「こや」に住んでいた貧しい人々が都市に働きにでると，木賃宿や長屋という名をもった都市の「こや」ないしは「へや」に住む。工場や炭鉱の労働者のためには，「寄宿舎」，あるいは「納屋」「長屋」と呼ばれる「へや」の集まりである集合住宅があった。最初，こういった集合住宅に住む男女は，結婚して所帯をもつだけの経済力を持たなかった。賃金は安く，雇用は一定していなかった。人力車の車引きは30－35歳を頂点にして力仕事ができなくなり，その上に家族をかかえるとなると小屋掛けや裏長屋の密集するいわゆる細民窟へたどりつく。『日本の下層社会』(1899年)を書いた横山源之助は長屋の一間だけの住宅について「九尺二間の陋屋，広さは六畳，大抵四畳の一小廓に，夫婦，子供，同居者を加えて五，六人の人数住めり。これを一の家庭とし言えば一の家庭に相違なけれど，僅かに四畳六畳の間に二，三の家庭を含む」[(6)]と述べ，正式の媒酌人のある結婚が少ないこと，夫婦関係がなが続きしないこと，同居人が多く，その入れ代わりがはげしいことを特徴としてあげている。この「長屋」と呼ばれる都市の極小住宅と，炭鉱では「納屋」と呼ばれた集合住宅の間取りは似ている。４畳半ないし６畳の部屋と土間で出来ており，入り口の他は三方が

壁である。煮たきは土間あるいは路地して，共同便所を利用した。

内務省は1911年に細民調査をはじめる。極小住宅の条件は10年前の横山の調査とさほど変わらず，四畳半に３，４人，６畳に６，７人が寝泊まりしており，平均一人が畳１畳の面積を専有している。スラムは膨張をつづけていた。労働者たちはようやく家族をつくり世帯を構成しはじめる。定住生活の諸費用のために逆に食費を切り詰めなければならなかった。1918年の米騒動は米の値段の高騰だけでなく，米屋が掛け売りをしなくなり，恐怖をおぼえた労働者の妻たちが行動をおこしたことにはじまった。



さらに10年後の1921年には，第一次大戦後に社会階層の差が広がった社会における下層生活の現状を把握するために第３回細民調査が行われている。長屋は相変わらず窓の無い部屋が多く，一人１畳という広さも変わらないが，台所と便所が屋内に入る傾向がはじまっている。家賃も日掛けから月払いに変化している。重工業の労働者の家族を中心に，ポヴァティ・

ラインからの浮上があり，子供の数が増えて平均世帯人員の増加がみられる。だがそのため妻の家事労働が増えて就業率がさがり，生活内容はむしろ苦しくなったと感じられた[7]。

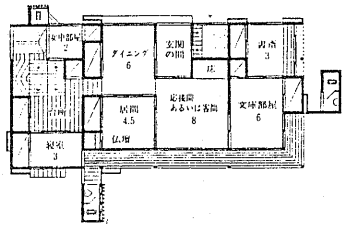
1923年の関東大震災により多くの家屋が消失し，住宅の形式は大きく変化した。最低住宅の場合も，それまでの長屋は部屋を10戸，20戸と長くつないだ形式であったが，震災以後は２戸から８戸までとなった。また，広さは長屋と変わらないが，小さな一戸建の貸家が数多く建てられた。貸家建設は1880年代からはじまって，日清戦争後，第一次大戦後など経済が好況を呈すると貸家の建設が増え，その間の不況のときには空き家が増えるという現象をくりかえしていた。関東大震災の後は東京には貸家建設が増えつづけていた。

２．「中程度の家」ができるまで（中廊下と茶の間のある家の創造）

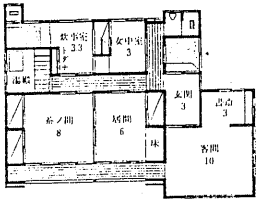
大正時代の建築雑誌を通読すると[8]，都市の問題はスラムと近郊住宅地の開発の二つであることがわかる。都市の内部には長屋と貸家があって，好景気によって農村から引き出されてきた新たな労働人口が暮らしている。他方，郊外にはもはや故郷には帰らないで都市に定住する住民たちが一戸建ての住宅の建設をはじめていた。

モースが観察した明治時代の東京の中流住宅には武士の屋敷の名残があり，庭に面した廊下に沿って接客重視のつづきの座敷が並んでいた。襖をとりはらうと，家の中はほとんど一つの広い空間になって大勢の客を迎えることが可能であった。ところが大正時代になると，廊下が家の中にはいってそれぞれの部屋に独立性をもたせる設計があらわれはじめる。1917年に雑誌『住宅』は「１．一家５人（夫婦，子供二人，女中）但し新家庭にして子供は当然生まれるべきものとして予定す。２．造作付き見積もり価格1500円以内。３．和洋いずれの様式たるを問わず，現代の日本中流紳士に適応したる改良住宅たるべからず」という条件で住宅競技設計を募った。

一等に当選した建て坪30.5坪の家では外からの客は，玄関横の洋間である書斎兼客間で迎えられて，家の奥には通されない，中廊下によって女中部屋が独立しているという特徴をもった家族生活重視の設計であった。

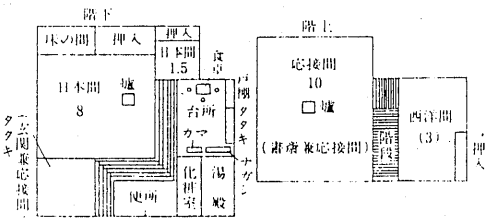


エドワード・S・モース
『日本のすまい・内と外』

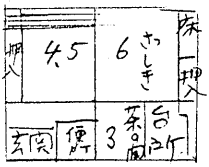


『住宅誌』主催，住宅競技設計(1917)一等入選
剣持初次郎案。中廊下と茶の間がある

その前年，1916年の『主婦の友』創刊号に載った「建坪20坪で僅かに500円」という「安価で建てた便利な家」の設計を載せている。建坪と費用にはかなりの差がありはするものの，客は客間までしか入れない，同居人の住空間を家族の空間から区別する点が共通している。この二つの家から客間と女中部屋を除くと，残りは茶の間と床の間のある居間の２部屋になって，貸家の平面図に近づく。女中部屋や客間が加わったり，居間が増えることはあるが，基本的にはこれが後まで「茶の間のある家」の名で呼ばれる職場と住宅を分離した給料生活者の家族生活中心の家となる。近代家族の抽象的入れ物である「家庭」は，こういった「茶の間のある家」の中に実現していくのであった。



三角錫子「安価で建てた便利な家」
(『主婦之友』第1巻第1号，1916年)



浜口ミホ『日本住宅の封建制』(1949)
俸給生活者労働者等の住む持家
ないし貸家の住宅 ― 下級程度

3．男性的な家（「囲炉裏端のある家」と「茶の間のある家」は共に家長の管理する空間であった）

農村の大きな「いろり端のある家」あるいは小さな小屋から都市に出てきた青年たちは，はじめは都市の流民として長屋や貸家で生活し，不況のたびに故郷の家へ帰ったのであったが，やがて都市に定住して所帯をもち，都市の中程度の家である「茶の間の家」に住んで「家庭」をきづいた。「家庭」制度と「家」制度が相異なる家族概念をあらわすように，都市の中程度の家である「茶の間のある家」と，その住民の故郷の家である「いろり端のある家」は相異なる住宅概念をあらわしていた。「いろり端のある家」では，囲炉裏のまわりに座る家族，同居人，召使の席は家長を先頭にそれぞれの位の順に定められており，それぞれが膳で食事をした。「茶の間のある家」の茶の間では家族が丸いちゃぶ台をかこんで食事をした。ちゃぶ台は家族の団欒と平等の象徴といわれる。

だがしかし「茶の間のある家」においても父の座は仏壇と神棚，天皇皇后の写真の飾られた下と決まっており，共通時間を刻む柱時計と世界の情報をもたらすラジオも彼の近くに置かれていた。こういった象徴的な装飾物によって，茶の間は先祖からの時間系と国家の空間の中に位置づけられていたのであった。「茶の間のある家」に住む家族は直系家族ないしは核家族の団結を強め，同居人を排除する傾向をもちつつも依然として故郷の村にある「いろり端のある家」と深い関係を保っていた。茶の間と居間の他にもう一つの部屋があれば，それは隠居つまり家長の親の部屋あるいは故郷の「いろり端のある家」あるいは村からやってくる親族を迎えるための部屋であった。都市の住民も年になんども，故郷の「いろり端のある家」をたづねるのが常であった。「家」制度／「家庭」制度が二重構造であったと同じく，住まいのモデル「いろり端のある家」／「茶の間のある家」も二重構造をなしていたのである。

「いろり端のある家」と「茶の間のある家」に共通する特徴は，それが

家長のための空間であったところにある。「いろり端のある家」のつづき座敷,「茶の間のある家」の茶の間と居間はいづれも襖をとりはらえば一つのより大きな空間となり，家族それぞれは個室を持たなかった。寝室も共同であった。住宅の建設，引っ越し，あるいは季節の大掃除，季節毎の建具や床の間の置物の入替えなどは家長の主導のもとに行われた。

「茶の間のある家」は近代における日本住宅の典型となって，海外植民地においても，各地の気候風土に適応しながら，植民地の官舎，社宅となって数多く建設された。戦後も植民地には畳のある日本家屋が最近まで残っていた。台湾の映画の中には，戦争中の日本家屋がひきつづき官舎として使われている光景が残されている。朝鮮半島では，日本家屋は「敵産家屋」と呼ばれている。農村の大きな家や小さな家から都市に出た次男三男たちの一部ないしは多くはさらに植民地におもむいた。植民地には彼らが「家庭」をきづく条件があった。日本においてはすでに払底していた女中を雇い，その労働力に支えられて専業主婦が存在しえたのであった。植民地があって成立した近代家族であり，近代国家であった。

Ⅳ.「茶の間のある家」から「リビング・ルームのある家」へ（住宅史からみた日本近代史の時代区分－1945年か1975年か）

1．戦後の流行語「家庭」（「家庭」は1945年８月15日を越えて生き延びた）

先に述べたように，東条英機は「家」ではなく「家庭」に拠って戦争を行うと言った。銃後は「家庭」婦人によって支えられた。一方太平洋戦争において兵士は，天皇の赤子として戦い，戦死すると彼の家は「遺族の家」という称号をもらった。兵士は家のため，国のために死んだのであった。「家」も「家庭」も戦争に協力したのであった。

戦後，「家」制度の「家」は，封建制の遺物として断罪されたが，「家庭」は罪をまぬがれただけでなく，「家庭」を基盤とする新しい日本の建設が叫ばれた。私は1945年８月15日の前と後の『主婦の友』を読み比べて，衝撃

をうけた。敗戦の直前まで「家庭隣組」「家庭愛国」など，「家庭」を単位として戦争協力の組織をつくることを呼びかけていた同じ雑誌が，敗戦後の第１号である1945年11月号の表紙に「平和と家庭建設」の標語を刷り込み，『主婦の友』という雑誌名に “The Ladies Journal of Housekeeping” と英文タイトルが添えてある。巻頭文に「戦争中の家庭婦人の責任は重かった。とぼしい国力であれだけ戦ひつづけたのは，家庭があらんかぎりの力で戦争生活をつづけたからだ。平和日本の建設にも家庭婦人のもつ役割は大きい」と書かれていたからである。「家庭」は1945年８月15日を越えて生きつづけたのであった。

戦後の新憲法と改正民法（1947年）は「家」制度を廃止した。とくに民法第四編第二章「戸主および家族」（第732条から764条まで）は削除され，民法から「家」という語はなくなった。だが，「戸籍」と「氏」は残されている。夫婦は同氏でなければならず，夫の氏を称する場合には夫が，妻の氏を称する場合には妻が戸籍の筆頭者となると定められている。もはや家族の上に絶大な権力を振るう戸主はいないが，戸籍は代表者を持っている。現実には，戸籍の筆頭者はほとんど夫であり，妻が筆頭者である場合は婿養子のようにみえる点において，戸籍は家族を一括りにする，個人の上位にある集団となっている。

改正民法が想定する家族は，戦前からあった「家庭」の観念に近い。「家」の制度の「家」とはちがって，「家庭」という語は民法には用いられない。しかし，1949年には「家庭」裁判所が設置され「家庭問題」を取り扱っている。戦後教育の教科には「家庭科」がある。「家庭」は戦後，再び，流行語となったのであった。「家」と「家庭」の二重家族制度であった日本の近代家族は「家」だけを切り捨てて生き延びた，あるいは「家」にこめられていた意味の一部が「家庭」の中に残って二つは一つになったと考えられる。戦後の結婚式においても，式場には両家の結婚式と掲示され，披露宴では「幸福な家庭」をきづくようにという演説がかならずなされる。

なお，「家庭」という語についての言語アンケートは，この語の特殊性を明らかにする(9)。「家庭」は「ホーム」の翻訳語の一つであったのはたしかだが，その後しだいに意味を充填されて，現在では他の言語のなかに対応語をさがすことがむづかしい，翻訳しにくい語の一つである。「家庭」は家と庭という漢字から構成される熟語であり，たしかに空間性を有するのだが，「寝る」「食べる」「死ぬ」など具体的な行為をあらわす動詞と共に使うことはできにくい。つまり，「家庭」は抽象的空間である。「家庭」はまた「学校」，「企業」などと対概念になっており，一種の法人のような人格を与えられている。単身生活者は「家庭」を経営すると認められない。夫婦だけで子供がいない場合，アンケートは「家庭」が成立するかどうかの境界線上を示す。片親であると「母子家庭」「父子家庭」あるいは「欠損家庭」と呼ぶ。再生産を終えて子供たちが独立すると「老人家庭」といわれる。つまり「家庭」の形成には夫婦と子供が揃う家族であることが必要である。

しかも「家庭」は「幸福な」「良い」「楽しい」「健全な」というほめことば的な形容詞を要求する傾向がある。つまり，あるべき「家庭」のイメージがあり，「家庭」の果たすべき役割がある。「家庭」は規範性の強いことばなのである。政府は1968年に「期待される家庭像」を，1980年には「家庭基盤充実のための基本的施策のとりまとめ」を，1984年には「家庭機能とその施策の充実の方向に関する調査報告書」を発表した。その中には国民の祝日の一つとして「家庭の日」を設ける，家庭省のような家庭問題専門の省庁を設ける，家庭生活の安定を中傷し，損なうようなマスコミ表現に対し，警告，告発する機関をおくなどの案がだされている。

2．女性的な家（「リビングルームのある家」は家長ではなく主婦の空間となった）

近代家族の抽象的入れ物である「家庭」と具体的な入れ物である住まいは深い関連をもつ。住まいを持つことによって「家庭」の理念を実現させ

ようという欲求は，1945年の敗戦後の住宅不足のなかでとくに切実であった。都市の戦災による家屋の焼失に加えて植民地からの引揚によって増えた人口にたいし，家屋の絶対的な不足がつづいた。1959年に経済白書が「もきや戦後ではない」と書いたのにたいして，建設白書が「住宅は戦後にとどまっている」と反論したのは有名な話である。住宅数がようやく世帯数を上回るのはその10年後のことであった。それまでのあいだ，応急処置として劣悪な住宅が大量に建設される一方で，人々の住まいにたいする夢は強く，数多くの住宅論が出版され，読まれた。

優れた住宅論の一つである浜口ミホの『日本住宅の封建性』(1949年) は，過去のいわば家長の家としての格式の表現であった住宅を，人間が休息し，食事し，眠り，子供を育てる機能的な装置とすることを説いている。浜口ミホは実践的な建築家として，床の間の廃止，玄関という名前の変更を説き，台所の改善に貢献した。茶の間より一段低い設計で召使の働き場所として設定されていた台所を茶の間と同じ高さにして，茶の間と台所の間にあった仕切りを取り去ったダイニング・キッチンを南向きの日当たりの良い場所に設定するなど設計上の住宅改善は，そのまま家庭内の主婦の地位の向上につながるものであった。彼女は住宅公団の最初の団地のステンレス流しの設計を行っている。浜口ミホは格式を重んじる家の座敷は多目的使用であるが，最小限住宅では部屋は機能本位に用いられることを発見し，寝食分離を説いた西山卯三とともに戦後住宅の理論的基礎を提供した[10]。

それでも家の設計は急激には変らない。戦後も戦前にひきつづき「茶の間のある家」の建設がつづいていた。だが，「茶の間のある家」の内側に，微妙な変化がはじまっている。朝日新聞に1949年12月１日から1974年２月21日まで連載がつづいた長谷川町子作『サザエさん』は，三世代同居家族で「茶の間のある家」の住んでいる。じつは『サザエさん』は最初は夕刊の漫画であった。朝日新聞朝刊には，1949年１月１日から1951年４月15日まで，アメリカの漫画『ブロンディ』が連載されていたのであった。ダグ

ウッドの妻ブロンディは階下にリビング・ルームが，二階に夫婦の寝室と子供の寝室がある住宅に住んでいた。占領時代の朝日新聞の読者は朝刊ではアメリカ式の「リビング・ルームのある家」のなかで展開するアメリカの家族生活の漫画を，夕刊では「茶の間のある家」における日本の家族生活の漫画を読んでいたのであった。核家族の住む「リビング・ルームのある家」と直系三代家族の住む「茶の間のある家」の違いはあるものの，二つの漫画には主婦である女主人公の名前がついているところが共通している。

そして1951年４月16日，日本占領軍最高司令官であったマッカーサーの離日の日，それまで夕刊の連載漫画であった『サザエさん』が，『ブロンディ』といれかわって朝日新聞の朝刊漫画となったのであった。日本的な「茶の間のある家」への回帰と見えるかもしれない。しかし，同じ「茶の間のある家」に住んでいても，『サザエさん』の三世代同居家族は，戦前の「茶の間のある家」に住んでいた夫の率いる核家族あるいは夫の両親と同居する三世代家族とは微妙にちがっていた。主人公のさざえさんは夫と子供を連れて，自分の両親および弟妹と同居している。むしろ女系家族のニュアンスが強い。「茶の間のある家」がもはや家長の支配する空間ではなくなりつつあることを，漫画家は鋭くとらえたのであった。

その後台所と茶の間の間にあった仕切りがとれてダイニング・キッチンとなり，さらに家族用の茶の間と，来客用の座敷あるいは応接間の区別もなくなって日本化したリビング・ダイニング・キッチンの様式が定着した。こうしてできた「リビング・ルームのある家」はますます専業主婦の管轄下にある空間となっていった。一家の主人の書斎であり，接客空間であった応接間が主婦の空間であるリビング・キッチンに吸収された結果，夫専用の空間がなくなったからである。じっさい日本社会の産業構造がかわって第一次産業の比重が減り，農民が90％をしめていた明治前半とは逆に，農業人口は10％以下に減って，給料生活者の割合が大きくなり，サラリー

マンである夫が家にいる時間は，高度成長以後どんどんと短くなっていった。「リビング・ルームのある家」が女の家と化したと言われる所以である。

『新３LDKの家族学－子供に個室はいらない』(1982年) を書いた宮脇檀は「今日本の住宅に見られるきわめて安手の趣味というのは，すべて個人がものを判断せざるを得ないという情況に基づいている。その個人を目指して安手さを迎合している産業資本が商品を供給するということで出きている。しかもいけないことに，家に関する決定を，近年女だけでするようになってきた。つまり日本の家が今，”女の家” と化してしまっている。私自身の経験からいっても，設計の打ちあわせにくるのは，八割は女である。かつての日本の男たちは，－幸田露伴がその最もよき例であるが－家の中のことを決定していた。それは家長としての男の義務であった」(11)と書いて遺憾の意を表明している。

また別の建築家はあるマンションの便所の印象を次のように書いている。「洋便器がひとつあるだけなのだが，それを中心にあらゆる織物編物が集結していた。『かわいい』スリッパで『かわいい』タイルの上を一歩あゆむや『かわいい』マットがあって，便器のカバーは色糸細工の技巧が総集されて，ほとんど便器に見えぬほどであった。これはもはや便所ではなくて女の牙城であり，女性文化の作品展示室であった」(12)

「女の」という形容詞は男性建築家によって，装飾過剰，流行追従，表面的といったけなし言葉の意味で用いられている。ところが夫が「女の家」と化した住まいに疎外感を抱くと同様，専業主婦は「女の家」を完成させるやいなや，そこを閉じ込められたと感じはじめたのであった。「男の家」から「女の家」への変化の，さらにその先に来るものについては，戦後の住宅供給に大きな役割を果たしたいわゆる公団住宅の設計の変遷から占うことができるであろう。

３．1975年における日本住宅公団の設計の変化とワンルーム・マンション

の出現（3 LDKの住まいモデルの完成の瞬間に近代家族は変貌をはじめ，「リビング・ルームのある家」は中性的な「ワン・ルーム」へと分散をはじめる）

戦争中の空襲による焼失と家屋疎開による取り壊しが265万戸，その他に海外植民地からの引き揚げ者の需要，戦争中の資材不足による建築のとどこおりなどを合わせると，1945年の敗戦直後の住宅不足は約420万戸であったといわれる(13)。政府の住宅対策は間に合わず，「バラック」と呼ばれた，住宅の条件をみたさないトタン屋根の堀っ建て小屋が焼け跡に住民の自力で建てられていった。一つの屋根の下に数家族が同居する住宅難が長くつづいた。

住宅金融公庫法は1950年に，公営住宅法は1951年に制定され，日本住宅公団は1955年に設立され，その後，住宅都市整備公団となった。鳩山内閣の住宅建設10カ年計画（1955年）をはじめとして政府はようやく住宅問題を政策に組み込みはじめた。池田内閣は10年間に1000万戸の建設，一世帯一戸を公約した。中流以上の人に家を建てる資金を貸す住宅金融公庫法が真先に発足したことからもわかるように，政府の住宅政策の基本は自力による持ち家主義であった。民間のマイ・ホーム獲得願望と政府の「持ち家政策」が相互に住宅建設ブームをあおっていた。その結果，不動産開発業，プレハブ住宅，マンション，ツーバイフォー住宅などの建設業，新築，中古住宅の流通業などを含む住宅産業が栄えた。

しかし家族の抽象的な入れ物である「家庭」を実現する具体的な入れ物としての住まいの観念の変遷は，公団住宅の設計の変化のなかでもっとも良く読み取ることができるであろう。日本の場合，公団住宅はフランスのH. L. M. などとはちがって，低家賃住宅として出発したのではなかった。公営住宅に入居するには給料が高すぎ，持ち家を建てるのはまだ困難という中間層のための集合住宅であった。また発足当時は設計と設備の先進性を誇っており，民間の住宅産業が建てる住宅の設計にも影響を及ぼした。

人口と住宅の割合，一人当たりの住居空間の広さなど住宅にかんする統計の数字が戦前の水準を回復し，はるかに追い越すには，公団住宅の大量建設の貢献が大きかった。他方では，規格化された融通のきかない空間に家族をおしこみ，家族の大きさの規模を制限し，ライフスタイルの画一化を強いるところがあった。

公団住宅史は，公団の歴史を1955－64年の第１期，1965－74年の第２期，1975年以後の第３期に分けている。「模索検討期」と呼ばれる第１期のあいだに全国共通の標準設計，５階建ての壁式構造の工法，ステンレス流し，ホーロー浴槽，吊り戸棚，スチールサッシ，水洗の洋風男女兼用便器，エレベーターなどの住宅部品の工場大量生産のシステムがつくられた。最小限住宅の研究から，ダイニングキッチンによる食寝分離，nDKとして部屋数に変化のある親と子供の就寝分離を原則とした設計が採用された。現実には１DK，２DK，３K，３DKの小規模住宅が主流であった。しかし防火が考慮されたコンクリート住宅，南側に移されたダイニングキッチン，美しいステンレス流し，一戸に一つの浴室，戸締まりの便利なスチール扉とシリンダー錠などのある団地住宅は従来の木造建築の住宅には無い，進歩した住宅としてうらやましがられる存在であった。電気洗濯機，掃除機，冷蔵庫など家庭用電気製品を率先して生活にとりいれたのも先進的である程度の経済力をもつ団地の住民であった(14)。

２DKは狭いながら一方で玄関や床の間を廃止し，他方で台所の地位向上，ダイニング・キッチンにおける一家団欒を演出して，浜田ミホの主張した日本家屋の封建性の撤廃に通じる設計である。他方，この間取りには夫婦の親世代を収容する余裕はない，核家族原則である。また子供の数が２人，３人と増えると，３DKあるいは一戸建てに移住するか，あるいは夫婦寝室をやめて，父親と男子，母親と女子の就寝にする他なく，子供の数は制限される。それでも公団の入居募集はつねに需要が供給を上回っていた。

発展的応用期といわれる第２期の途中1968年に統計は，総数において住

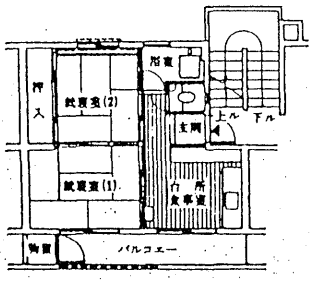
宅数が世帯数を上回ったことを告げた。それまで均質な住宅の大量供給を目的としていた住宅公団は，住宅の質についての検討をはじめている。それまで団地誘致は地域から無条件に歓迎されることが多かったが，しだいに開発に条件がつけられ，公団も「地域と融和した団地づくり」を目指すようになる。また諸設備の向上の他に，あたらしくリビング・ルームを取り入れたシリーズがはじまっている。一世帯一住宅が目標であった次にはその住宅の中身が一人一居住室が目標となって３DKが実現し，その次には一人一室と共有室がある３LDKの普及がはじまった。むろん，住宅規模の拡大は経済の高度成長の後を追うものであった。

こういった努力にもかかわらず第３期は，1976年におこった新築の公団住宅に応募者が不足するという「空き家」現象ではじまった。住宅公団にとって，住環境の最低条件を満たすだけでなく，多様性の追求という方針転換の時期となった。団地は家賃が高く，狭く，通勤が次第に遠距離になるという批判が高まる。これにたいし，住宅環境の整備と，それまでの標準設計では画一的であった設計の多様化という方針転換が行われた。同じ建物の最上階は天空性を一階は接地性を，側面の部屋には窓があけられるといった工夫がはじまる。現在のとくに公団の分譲住宅は住宅産業が建てるマンションに劣らず設備の豪華と多様性を追求して５LDK，６LDKの住宅も出現している。老人用の公団住宅の設計はすでに第２期にはじまっているが，その他に三世代同居型，障害者用住居も少数ながら考慮に入れられるようになった。

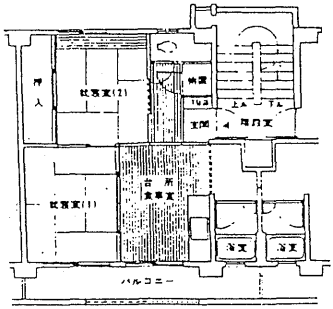
このような公団住宅の戦後史をたどってみると，究極の標準設計である３LDK設計の完成と，その直後の方針の転換期つまり1975年前後が公団だけでなく，日本社会全体の家族と住まいの転換期だったのではないかとおもわれる。つまり，それまで常にモデルが先行していた家族と住まいであったが，この瞬間には家族の抽象的入れ物である「家庭」と具体的入れ物としての住まいモデルの一致がみられた。サラリーマンと専業主婦の夫婦，

平均一人か二人の子供で構成される核家族は夫婦の寝室，子供部屋，団欒の空間であるリビング・ダイニング・キッチンをもった３LDKである。３LDK設計の特徴は平均的核家族であることを強いる規範性の強さであろう。入居資格は夫に一定の収入があることを要求するから，団地住民の生活水準は一定する。入居，住み替えに共通性があってライフ・サイクル，ライフ・スタイルがほぼ同一である。外国人の入居は永住権をもつことを条件にするなど，きびしい。３LDKはまさに，いわゆる健全「家庭」の入れ物であって，欠損家庭や独身者の入居はむづかしい。また。この限られた空間では人間の誕生と出産を住まいの外，病院にゆだねざるを得ない。結婚式，葬式も住まい以外の設備で行われるのが普通になった。こういった設計とライフ・スタイルをもつ３LDK,またはそれに部屋数の追加のあるnLDK設計は公団住宅だけでなく，マンション，建売住宅にも広がった。

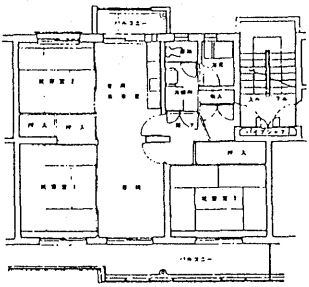
公団住宅標準設計　２ＤＫ



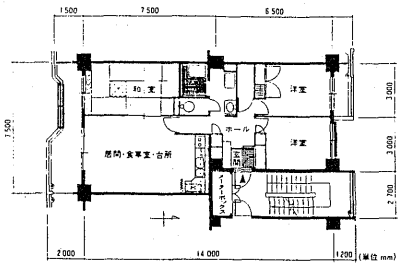
全国統一型標準設計



３ＬＤＫ

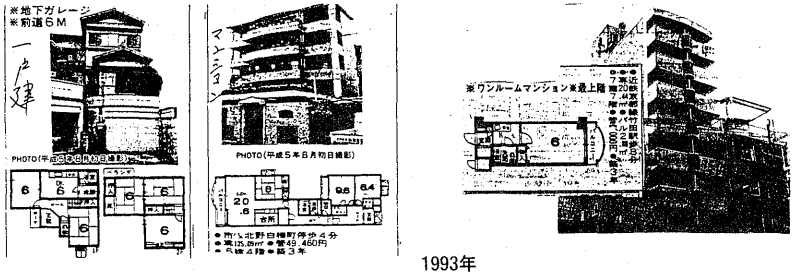


家庭科教科書に載る３ＬＤＫ



『新版家庭一般 ― 新しい家庭の創造をめざして』
文部省検定済教科書（1990年）　３ＬＤＫ

ところが，3 LDK完成の直後から，和製英語を使ってワン・ルーム・マンションと呼ぶもう一つのタイプの建造物が増えはじめる。3 LDKの「リビング・ルームのある家」で育った子供たちは大学生になるとしばしば別の都市の大学をえらび，親の仕送りをうけ「ワン・ルーム」での生活をはじめる。子供たちだけでなく，遠距離出勤や単身赴任の夫も二つ目の住居を持ちはじめた。余裕のある家族あるいは逆に地価高騰により都市での広い住宅をあきらめた家族が遠隔地に別荘をもつことをはじめた。現在では住宅産業もマルチ・ハビテーションといった用語をつくってこれに応じている。



1993年
住宅広告より

都市を中心にリブ，女たちの各種グループ，フェミニズム運動，女性学などの動きがはじまるのも，1970年代からである。3 LDKの内側にも，変化の兆しがあらわれる。家庭用電化製品や自動車の普及，家事の社会化，何よりも住まいそのものの獲得と子供の教育費用の重圧が家計にのしかかり，主婦はパート・タイマーとして労働市場にひきだされることがはじまった[15]。団地には，夫の出勤と子供たちの登校のほぼ一時間後にさまざまな企業からの送迎用のマイクロ・バスが横付けして，子供が学齢に達した年齢の主婦を迎え，午後４時に仕事を終えた主婦が夕食の用意に間にあうように送りかえす風景がみられるようになる。

3 LDKの「リビング・ルームのある家」の完成は，日本の近代家族の完成の瞬間でもあったのではなかろうか。そして完成と同時に変貌がはじまっ

た。完成した住宅に夫だけでなく妻，子供の不在時間がふえる。「リビングのある家」では家族全員がそれぞれの部屋に分かれ住み，さらにその部屋が「ワン・ルーム」マンションのように空間に分散することがはじまったのである。一括されていた家族集団の中から一人一人の個人が姿を表したと言えるであろう。むろん，政府は政策に苦慮するのであって，それがいわゆる「家庭基盤充実政策」となってあらわれる。だが政府が先にモデルをうちだし，国民がモデルを追いかけてきた従来の傾向とは逆に，家族のあり方と住まい方の変化が先行し，政府が対策に追われるのは新しい傾向ではなかったろうか。

V．おわりに（日本の近代家族モデルと住まいの変遷の特徴。将来はあらたな二重家族制度「家庭」／「部屋」か，それとも「部屋」群の多様な再編成か？）

「部屋」ということばは，近代になって価値が逆転した語である。『明治大正史世相編』を書いたときの柳田国男は「部屋」をあきらかにけなし言葉として用いている。民家の歴史をみても，伝統的民家において地方によっては「納戸」あるいは「部屋」と呼ばれる空間はたいてい北側にあって三方が壁の薄暗い一室である。若夫婦の寝室となることも多かったが，使用人，病人，狂人を隔離する空間でもあった。妻妾同居の妾のための空間となって，妾が「お部屋」と呼ばれた例もある。中廊下のある家の設計のときにも最初に実現した部屋である女中部屋は，身分差別のための空間であった。「部屋」のつく熟語は「部屋住み」，「大部屋俳優」などけなし言葉的表現が多かった。家長が管理する空間であった頃の住まいは個人ではなく家族集団の入れ物とされていたのであり，その空間においては家長以外の個人は姿をあらわしてはならなかったのである。

だが，女中部屋だけでなく子供部屋，書斎がつくられていくにつれ，「部屋」という言葉の価値はしだいに逆転をはじめる。「ワン・ルーム」だけで

なく公団，マンションなどの集合住宅の一戸を部屋と呼ぶことも多くなった。最近は『美しい部屋』『私の部屋』といった名前の室内装飾の雑誌が出現して個人の部屋を美しく飾ることをすすめている。こうして「部屋」のけなし言葉的な意味は完全に失われた。

さて，「いろり端のある家」「茶の間のある家」が家長の管理する，原則としては男の家であり，「リビング・ルームのある家」が専業主婦が管理する女の家であったとしたら，「リビング・ルームのある家」から分散した「ワン・ルーム」にジェンダーはあるのだろうか。賃貸しの「ワン・ルーム」の場合，レディス・マンションと銘打って独身女性に安全保障を売り物にする他は，ジェンダーの無い空間を用意する方が顧客の回転に有利である。借り主は室内装飾や家具によって過剰なほどのジェンダー表現をすることが可能であるが，部屋は機能的には中性を旨とするであろう。

日本の近代家族のモデルは明治革命の130年後の現在，ここまで変化してきた。変化の特徴はモデルの浸透が急激で，徹底していることであろう。そのためには，学校教育と新聞雑誌，ラジオ・テレビが総動員される。モデルが現実に先行し，モデルは強制力をもつにもかかわらず，モデルに追いつくための努力が国民の自主性にゆだねられる形がとられてきた。モデル・チェンジはこれまでのところ成功している。「家庭」家族は，子供に質の高い教育を与えるのに適した家族である。これは日本社会の産業構造がしだいに教育をうけた質の高い労働力を必要とする傾向に一致する。またモデル変化が急激であるにもかかわらず，二重構造による現実との適応が巧みに行われてきた。

現在，この「ワン・ルーム」と「リビング・ルームのある家」は家族の行き来と親が子供に対してする仕送りによってつながっている。「ワン・ルーム」に住む若者たちは男女を問わず，親たちが残っている「リビング・ルームのある家」を「実家」と呼んでいる。「実家」という言葉はかつては，嫁入りした女性が自分の生まれた家を指して使い，男性は用いなかったもの

である。これもまた意味内容を変更してつくられた新語である。心理学者の小此木啓吾は『家庭のない家族の時代』(1983年) の到来を告げた[16]。だがもし現在の若者に「ワンルーム」が仮の住まいで「リビング・ルームのある家」が「実家」つまり本当の家と意識されているとすれば，かつての「家」／「家庭」の家族モデルが二重構造であったように，このたびもまた「家庭」／「部屋」の二重構造の時代であるのかもしれない。すでに一日の大部分の時間をそれぞれ別々に過ごし，さらには同じ空間では暮らしていないこともある家族を「家庭」の理念が一つに統合しようとするために，理想的な「家庭」のイメージ作りはそれだけよけいに強く行われている。教師たちの運動の結果，男女共修となり，男女役割分担を批判するまでにいたった高校の「家庭科」であるが，「生活科」と名前を改めることはしていない。葬式から結婚式まで，天皇家の家庭行事は，ますます強く政治的な影響力をもつことが期待されている[17]。

しかしわずかではあるが，二重家族制度とは別の傾向も現れている。従来の家族集団からは独立し，「家庭」の規範の外に出た個人の姿がしだいに目に見えるようになってきた。むろん「ワン・ルーム」で優雅なシングルの生活を送ることのできるのは，親からの仕送りを宛てにすることができる大学生，ないしは完全な労働力として通用する経済力をもった人間である。しかし個人は完全な労働力でありうる期間が限られており，病気，老年，失業などによっていつでも社会的弱者となることがありうる。個人はまた他者と共に生きたいという欲求をも持っている。部屋に分かれた個人は，次にどのような集合の仕方をするかを考えはじめている。すでにシルバー住宅などの試みが始められている。だが現在はむしろ具体的な入れ物としての新しい住宅の建築が考えられる前に，観念のなかでさまざま実験がなされている時期なのではないだろうか。

日本の近代小説の中で重要な位置を占めてきた「私小説」は，よく読めばほとんどが家庭と住まいをつくる努力とその挫折の物語であることがわ

かる。書き手の多くは農村から都市に出て学業をおさめ，都市に住んで「家庭」の経営をはじめる，あるいは分家して初代家長になろうとする男性であった。「無頼派」と呼ばれる作家たちも例外ではない。彼らはとくに巣作りの失敗について書いたのであった。その傍らで女性作家は家族と住まいをつくる努力というよりも父の家，夫の家からの女の逃亡を描く「家出」小説を書き続けたことは興味深い。

だが最近新しい傾向が生れている。富岡多恵子をはじめとして多くの小説家あるいは漫画家たちが実験的な家族の物語を書きはじめている。そこには，婚姻と血縁にはかぎらない様々なくみあわせの家族が構想されている(18)。「家庭」は夫にとっての私的空間であったが，専業主婦にとってはむしろそこで自分の労働も妻という社会的地位も実現する公的空間であった。市場労働によって「家庭」の外にひきだされた女性たちは，男性とおなじく，あらためて私的空間と時間を欲求するようになった。先に述べた男性的な家も女性的な家も，国民国家の基礎単位としての家族，いわば社会のための家族の入れ物であった。ところが実験小説あるいは未来小説の中では，ひとたび分散した中性的な部屋が再編成されるとき，社会のための家族とその入れ物ではなく，いかに生きるかだけでなくいかに死ぬかの問題もふくめて，個人の可能性の実現を支援する未来家族とその入れ物の形がどのようなものであるかが模索されている。

注

この論文は，オーストラリア国立大学（ANU）で1993年９月20－23日に行われた国際学会 "Stirrup, Sail and Plough, Conference on Japanese Identity" に提出したものであり，次に載せる英語のpaperが口頭発表した内容である。

1．cf．西川祐子「住まいの変遷と『家庭』の成立」，女性史総合研究会編『日本女性生活史』第４巻，東京大学出版会，1990年

cf．西川祐子「近代国家と家族モデル」，『ユスティティア』第２号，ミネルヴァ書房，1991年

2．西村信雄『戦後の家族法の民主化』上巻，法律文化社，1978年，p．5

3．cf．西川祐子「戦争への傾斜と翼賛の婦人たち」，女性史総合研究会編『日本女性史』第５巻，東京大学出版会，1982年

4．エドワード・S・モース著，上田篤，加藤晃規，柳美代子訳『日本のすまい・内と外（"Japanese Homes and their Surroundings"』鹿島出版会，1979年，p.69

5．柳田國男「明治大正史世相編」『柳田國男全集』第24巻，筑摩書房，p.189

6．横山源之助『日本の下層社会』，岩波文庫，1949年，p.57

7．cf．社会福祉調査研究会編『戦前日本社会事業調査資料集成１，２，３』，勁草書房，1989年

cf．中川清『日本の都市下層』，勁草書房，1985年

8．たとえば1917年に『関西建築協会雑誌』として発行され，1920年改題して戦後もつづいた『建築と社会』誌を参照。

9．cf．西川祐子，佐藤方代，吉川寛，山田伸明，水野豊「ことばに表れた家族と家，１－４」，『国際研究』，中部大学国際地域研究所，1984－1987年

10．cf．濱口ミホ『日本住宅の封建性』，相模書房，1949年

cf．西山夘三『これからのすまい』，相模書房，1947年

11．宮脇檀『新・３LDKの家族学－子供に個室はいらない』，グロビュー社，1982年，p.45

12．丹羽小丸「台所から覗いた家族の変容」，『群居』９号，群居刊行委員会，1985年，p.45

13．cf．塩田丸男『すまいの戦後史』，サイマル出版会，1975年

14．cf．『日本住宅公団史』，日本住宅公団発行，1981年

15．cf．上野千鶴子『資本制と家事労働』，海鳴社，1985年

16．cf．小此木啓吾『家庭のない家族の時代』，集英社文庫，1986年

17．cf．色川大吉『昭和史世相編』，小学館，1990年

18. cf. 西川祐子「日本の近代小説にあらわれた３つの家，そして部屋」，『国際研究』，中部大学国際地域研究所，1989年

cf. Yuko NISHIKAWA ; "Three kinds of Ie (Houses) in the Modern Japanese Literature"Intercultural Communication Studies" vol I : 2, Fall 1991

cf. 西川祐子「借家の文学史」，『変貌する家族』，第３巻，岩波書店，1991年

The Modern Japanese Family System:

Yuko Nishikawa

I. Introduction

Pre-World War II Japan declared itself a family state and most Japanese people believed that the family state was unique to Japan. This paper, however, takes the view that all nation states are family states,with the moderm family as their basic unit. It is for this reason that modern Japan was forced to devise its own invented traditions of family state, centered around the imperial family.

It is important to compare the various forms of the modern family in all nations. The model of the modern family has been influenced more by the nation-state than by the developmental level of capitalism. As power relations among nation states altered the internal state structure,in turn modern family models changed. This paper traces historical change in models of the family and of the physical structures that contained it. The Japanese family has been based on a dual structure made up of the "*ie*" and "*katei*" institutions. Through historical analysis of family models, Japanese society deserves cross-cultural comparison.

II. *Ie/katei* Institutions

The *ie* institution has been regarded as that family system which is distinctive to Japan. The word itself means literally house. After World War II,the *ie* was regarded as a relic of the feudalistic patriarchal family system headed by a father and succeeded by his eldest son,and was therefore abolished by the postwar Japanese constitution. The *katei*, on the other hand,was regarded as a Japanese equivalent to the English word 'home',based on the marital relationship. Thus, the term *ie* was assumed to refer to a feudalistic kind of family,while *katei* meant a moderm family. *Katei* became popular and was heavily in use in the process of constructing a modern state in Japan.

But both were either neologisms or at least commonly used words after the *Meiji* Revolution and they were used either in oppositon or as complementary terms. The *Meiji* Civil Code (1898) established the core of the *ie* institution,granting the head of the household (the patriarch) the right to control family members and the duty to worship ancestors, and establishing the principle of succession by the eldest son.

The *ie* was the basic unit of the nation state and the state was regarded as a higher organization above the *ie*. The fact that Japan was a latecomer participant in the nation-state system forced the government to form an absolute state system headed by the Emperor. The Imperial Rescript on Education (1890) represented the nation as an enlarged form of family. Furthermore, the concept

of *ie* referred not only to a contemporary household but incorporated all the members on family registration in the *koseki.*

The word *katei* (literally house-garden) was known in ancient Japan,and has Chinese roots. It became widely used in periodicals and novels in the 1880s, and entered into mass usage from the 1920s as a term contrasting with *ie Katei* referred to the nuclear family,while the emphasis in *ie* was on ancestor worship and parent-children relations. The two words did not stand in a simple relationship of contradiction but comprised a dual structure, constituting in sum the abstract framework for the Japanese version of the modern family.

Magazines which included the word *katei* in their title came into publication from the late 19th century. These journals emphasised the construction of *katei* based on the marital relationship,and therefore sharply different from the *ie.* The expected readers of these enlightening journals were urban male intellectuals and their wives,who were high school graduates. Yet, the number of housewives reading these journals who actually did housekeeping was very small.

The term *katei* became truly popular after women's commercial magazines had attracted a mas readership. *Shufunotomo* ('The Housewife's friend') defined *katei* as a consumption unit separated from production and recommended household account book-keeping and practical child rearing. The purpose was to provide housewives with an opportunity to reflect on their daily

life in order to facilitate practical house management. As these commercial women's magazines became popular, the opposition between *katei* and *ie* gradually became less clear. One of the most heated issues in these magazines was the conflict between a wife and parents in-laws,especially her mother-in-law,which came into being precisely because of the dual family structure under which wives were forced to be in service not only to the *katei* but also to the *ie*.

The industrial revolution in Japan brought about a flow of youth into the cities as labourers. The majority of those who came from farming areas were not eldest sons,but second or third sons who belonged to the *ie* merely by family registration. They frequently married in cities and remained there. This fact indicated that a dual family system operated : those who were still on the same family registration, in practice, formed separete nuclear families-*katei* in the cities. The foundation of these urban new families was however so fragile that when they encountered recession and war,they went back to their hometown, seeking assistance from their *ie*. In addition to these urban returnees, soldiers returning from wars were also accepted by the *ie*.

The dual structure of the modern family was the strategy of the Meiji government for the purpose of forcing entry into the modern world-system of nation states as a latecomer and of catching up in the world-wide capitalist competition: the rule of eldest son inheritance prevented the despersal of capital ; second and third sons could become factory or white collar workers between or

within a dual family system in which they remained on the '*ie*' register but actually ran urban *katei*; daughters of poor families were sold by their families as cheap labour to the factories ; when urban *katei* were crushed by depression or war members could return to their village *ie*, thus keeping state welfare provisions to aminimum.

Ⅲ. Transition from *iroribata* (traditional open fire-place) home to *chanoma* (Japanese-style dining room) home.

Ie and *katei* signify abstract containers of the modern Japanese family. But houses as the concrete containers of the modern family have models which also have changed greatly. After the Meiji Revolution,in farming areas, there were two types of house. A few people lived in large and comfortable houses with *iroribata* hearth, in which the patriarch held sovereign power and was entrusted with the worship of the ancestors.(To have been born in such a house a person would today need to be about eighty years old.) The majority, however, lived in shanties called *koya*, which originally meant a space designed exclusively for sleeping. The poor who lived in *koya* went to cities to work and settled in urban *koya*, equivalent to communal lodging (or doss) houses and known as "*kishukusha*", "*naya*" or "*nagaya*". A survery conducted in 1899 by Gennosuke Yokoyama showed that the membership of these lodging houses was very fluid; regular marriages were few and commonly did not last long; rooms were tiny, with two or three families to a four or six tatami mat space, with only one or no windows and commural toilet.

Surveys conducted up to the time of the Great Kanto Earthquake of 1923 showed little change in these conditions; the beginnings of indoor kitchens and toilets were noted, but families had grown in size, space was commonly restricted to one person to a tatami mat, and there were few windows. Rent was being paid monthly rather than daily.

The housing type changed greatly after the 1923 earthquake, when many houses were destroyed. The number of housing units. The ideal middle class family in the communal lodging houses (*nagaya*) decreased from twenty to eight, or even two. A number of separate shanties for rent became available.

During the Taisho (1912-1926) period, a new-style urban house with a *chanoma* (Japanese style dining room) was introduced. The ideal middle class family, consisting of husband and wife, two or three children and a housemaid, lived in such a house. The layout was based on demarcation providing public spcace for maids and guests and private space for the family members. Guests were restricted to public space. This model represented the core of a housing plan for those who lived on monthly salaries and put emphasis on their family life as *katei*. The *chanoma* was the venue for materializing the ideal family of the *katei*.

The difference between *ie* and *katei* was clearly represented in their housing layout. At a house with *iroribata* (*ie*) ,seating order was hierarchical, with the father-patriarch at the head, and each member having his or her individual small meal place. On the

contrary, at a house with a *chanoma* a single round table provided the locus for meals for all the household, representing symbolic equality among the members. However, the seat for the father was cleraly designated in front of the family altar with a photo of the emperor and imperatrice. A clock regulating universal time and a radio conveying world information were placed near his seat. These symbolic objects asociated a *chanoma* with ancestors and the state beyond this nuclear family.

The common feature linking a house with an open heath *iroribata* (*ie*) and that with a *chanoma* (*katei*) was the patriarchal authority and power which controlled space in both.

IV. From *chanoma* house to Western style living-dining room house.

The new constitution and revised Civil Family Code (1947) abolished the *ie* institution, but the family registration and a family name remained in use. A married couple was required to register the surname either of the husband or wife. Where the couple took the wife's family name, the household was registered as headed by the wife. In this sense, family registration demarcated the family members and governed individuals as a corporate entity. The pre-war dual family structure which had consisted of *ie* and *katei* institutions was altered,but the end of the *ie* did not mean the complete disappearance of *ie* elements, some of which were transferred to the *katei*.

After World War Two, people craved for their own houses due

to the immense shortage of housing. They dreamed of realizing an ideal *katei* by possessing their own house. The market for books on housing grew.

The architect Miho Hamaguchi advocated a relocation and redesign of the kitchen, which had long been despised as a work place for housemaids and was traditionally located below the living room. She suggested that the kitchen should be put on the same level as the *chanoma* and be situated in the south, facing the sun. She foresaw that renovation of the kitchen would lead to the improvement in the status of women.

On the day on which the commander-in-chief of the occupation forces, General MacArthur, departed from Japan, the American cartoon 'Blondie' which had introduced modern American family living to Japanese readers was replaced in the *Asahi newspaper* by 'Sazae-san',whose heroine was a full-time housewife who lived with her husband,a son, and her siblings at her parents' place. The popularity of this comic revealed that *chanoma-type* house was not governed by a patriarch any more, but rather was centred on a woman, the housewife.

The partition between the kitchen and the *chanoma* was also removed to make a western style living room for the family and guests. A studio for the father was also incorporated into this unique living room as the husband/father worked outside and spent little time at home. A house with this living room was obviously under the control of women. But, at that same moment,

as husbands began to feel asense of alienation in these'woman houses' (*onna no ie*) , and male architects referred disparagingly to trend chasing and over-decoration, housewives began to feel enclosed and isolated in their domestic space.

V. From Urban Development Corporation flats (1950s) to one room studios (1975-)

In the 1950s, the Japanese government targeted housing problems. It set up the Housing Loan Corporation in 1951 and provided financial assistance for building houses for the middle class. It also built a lot of public apartments (*kodan jutaku*) . to cope with the shortage of housing. By constructing standardized housing, it eventually regulated the size of the family and instituted a unique life style.

The history of these public apartments may be divided into three periods. The first phase (1955-64) was one of probation. All public apartments were made of concrete, facilitated with a dining kitchen facing south, and an inside bathroom. These modern public apartments were regarded as progressive compared with wooden houses without a bathroom. Residents were eager to purchase newly-introduced electric appliances, e. g. washing machines, vacuum cleaners, and refrigerators. The pubilc apartment units abolished the feudalistic features of the *ie*, but, at the same time they confined the size of the family to a nuclear family due to the absence of a guest room for parents. Shortage of space also restricted the number of children.

In the second phase (1965-74) , the emphasis was on the quality of the apartments supported by Japanese rapid economic growth. A living room was implemented and the popular size of each unit became 3DK or 3LDK, a housing unit with three bed rooms and one space used for living, dinning and kitchen.

In the third phase (1975 onwards) , people lost interest in standardized public apartment units because they did not meet with the diversity of their needs. The apartment became more luxurious and several types of units,including even 5 or 6LDK became available.

Looking at the history of public apartments after World War Two, 1975 appears as a milestone in terms of Japanese families and their housing. From this year onward, *katei* and its housing model started to go hand in hand. The most popular size 3LDK was suitable for a nuclear family with one or two children. The eligibility was strictly restricted to those with a certain amount of income. Temporary foreigners, single families and bachelors, who did not fit the image of *katei* were all excluded from these public flats. 3LDK became an appropriate residence for only a good *katei.*

Due to the restricted space in public apartment units, wedding ceremonies, births and funerals were undertaken outside the residence. This life-style penetrated into the Japanese society through the private real estate industry too.

However, immediately after the 3LDK units became prevalent,

a new type of residence,the *wanrumu manshon* or one-room studio, came into existence. Those rooms were initially meant for university students who had been brought up in a house with a western-style living room and came to the city for higher education. They took up their residence in these single studios financed by their parents. After graduation,they frequently started living in an apartment provided by their company. Husbands who commuted long distances also found it convenient to take up temporary residence in such a unit. The wealthy, and those who had given up buying a house in a city because of rising land prices, also started to buy villas (*besso*) in the rural areas.

In the 1970s, housewives started to work part-time to compensate for their tight household budget. The burden of education costs for their children and high housing rent brought them into the labour market.

The 3LDK and the house with a western-style living room marked the completion of the modern Japanese family, and has been followed by a further change in the form of the modern family. Thereafter, not only the husband, but also the wife spent little time at home. In a house with a western style living room, each member started living in his or her own room as if they were living in one room studios in a city.

Therefore,the government started introducing a new family policy to strengthen the bonds of *katei*. The introduction of the govenment family policy has had a long history, but what was new

this time was that it was the first time for the government to follow the people in presenting an ideal model for their family and housing.

VI. Coclusion — *Katei/heya* Institutions

Heya, meaning 'a room' was long used as a pejorative word. The maid's room, for example, was clearly demarcated to show her lower status within the family. The *ie*, where a patriarch controlled the whole space, was container for all the family members, and there was no single space reserved for any individual member except the head of the household. Yet, the meaning of *heya* has been transformed recently.'One room studio' has a neutral connotation in terms of function,compared with the masculine *iroribata*-type *or chanoma*-type house,or with the feminine house with its western style living room. Magazines with titles such as 'My Room [*heya*]'or 'Beautiful Room [*heya*]' began to appear. Change in the model of the modern Japanese family have been profound, and the changes were characterized by the rapidity and thoroughness with which they spread through the society as the people were mobilized through school education, print, radio and electronic media.

Now we can for see the emergence of a new dual family structure comprising a house with a western-style living room and one room studio. University students who reside in one room studios refer to their parents' houses as *jikka*, a term traditionally used by a woman after marriage to refer to her parents' house. These students regard their parents' house as a 'real house' while their studio is a temporary residence. If this is correct, it reveals the dual family structure continuing in this modern era. Furthermore, the term *katei*

recently seems to have been given a new meaning as representing an ideal family life, although the reality no longer correlates with the ideal. The word *katei* is essentially a bureaucratic tool, but one with a powerful normative value.

At the same time that Joan Wallach Scott was stressing the political content of the concepts of gender, and Lynne Hunt was revealing the workings of 'family romance' in the images and rituals of the world's first modern revolution,we in Japan were attempting to rewrite the history of everyday life,and discovering that the prewwar imperial house had subtly modulated within a dual system of *ie* and *katei*, functioning not only through rituals of ancestor worship and the creation of a myth of an etemal blood line, but through images of imperial domestic life displayed in the pages of glossy new women's magazines. When put in comparative perspective, the standard schema of prewar Japanese society based on a unique 'emperor system family state' has to be reversed. The Japanese system was not in the least peculiar; all modern states have been 'family states'. That is precisely why modern Japan was pressed to invent its own traditions of family state centred on its imperial house.

A further new trend, apart from the emergence of this new dual structure, is also foreshadowed. Individuals who reside in a *heya* seek new forms of co-habitation. The *shiruba* housing plan (housing plan for seniors) illustrates one new style of co-habitation. Female writers such as Tomioka Taeko began to write about a form of living in which co-habitation would not be limited to conjugal or

blood ties, but in whcih an individual could pursue the maximum achievement of life objectives. The male household and the female household were both receptacles for families *for* society, in which the family was the basic unit of the nation state, but in experimental or future novels we can see a groping towards a family of the future (and the housing in which it will live). The neutral '*heya*' rooms which once had been scattered would be gathered into places which would serve as supports for the fulfilment of the individual, including a relevance not only for how to live but also how to die. rather than as receptacles of the family *for society.*

Translation: Minako Sakai and Gavan McCormack